

ベストピア
Bestopia

「パリ通信 64号」

<http://jkoga.com/>

平成二十九年四月
第六十四号

< 2017年4月 >

古賀 順子

復活祭の満月

4月11日火曜日午後22時30分、東の空に、復活祭の大きな満月が昇っていました。オレンジ色の満月は、パリの灯りと呼応するかのように輝き、夜のセーヌの川面を照らす光を眺め、一枚の絵を思い浮かべました。

ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ(1824-1898)作『敬虔な思いに支えられ、眠る街を見護るジュヌヴィエーヴ』(1898年)。パリ5区にあるパンテオンの北の側廊を飾る油絵です。聖ジュヌヴィエーヴの生涯を描いたピュヴィス・ド・シャヴァンヌ連作の一枚で、4,62m(高さ) x 2,26m(横)の大きな壁画です。壁画と言っても、フレスコ画ではなく、アトリエで、キャンバスの油彩画として制作し、完成後、壁に貼り付けたものです。

聖ジュヌヴィエーヴは、セーヌ川を照らす大きな満月の下で静かに眠るパリの街を、心配そうに、寝ずの番で見護っています。静寂な図ですが、聖人が、パリの運命に心を砕く、長い不安の夜です。ジュヌヴィエーヴは、420年頃、パリの郊外ナンテールに生まれます。幼い時から非常に信心深く、彼女の祈る姿は多くの人を動かし、確固たる信仰を貫き、パリを救う天命を担っています。451年、アッチラ率いるフン族がパリを包囲した時、ジュヌヴィエーヴはパリに立て籠り、民衆を励まし、街を守ったと言います。フランク族に包囲され、食料がなくなり、ペストの危機に晒された時には、セーヌ川に舟を出し、食料調達に成功し、民衆を飢饉から救います。満月の夜、パリの街に思いを馳せる聖人の姿は、時間を超え、場所を超越して、月の光に祈る心、祈ることで生まれる優しさと強さを表現しているように感じます。

街を救ったジュヌヴィエーヴは、パリの守護聖人となり、今日、パンテオンが立つ丘は、彼女に捧げられた聖地です。パンテオンは、1744年、大病を克服した

ルイ15世が、聖女に感謝の意を表して建てさせた神殿で、聖ジュヌヴィエーヴ修道院の跡地です。パリの高みからセーヌ川を望む、静止した聖人の絵は、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ晩年の傑作です。

1824年、リヨンに生まれたピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌは、神学と修辞学を学ぶため、上京します。イタリア旅行中、短期間、ユージェヌ・ドラクロワ(1798-1863)に絵を学び、パリのトマ・クチュール(1815-1879)のアトリエに入ります。テオドール・シャッセリオー(1819-1856)に影響を受け、晩年、シャッセリオーの友人であるルーマニア貴族マリー・カンタキューゼーヌと結婚し、彼女が、パンテオンの連作「ジュヌヴィエーヴの生涯」のモデルです。

画家として評価されるのは、1860年代からで、ヨーロッパ全土で大きな壁画が流行する時期と重なり、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌは、その第一人者となります。60年代に、ピカルデー、アミアン美術館に大きな壁画を描き、続いて、マルセイユ、リヨン、ルーアン美術館、ポワチエ市庁舎、パリ市庁舎(「夏」と「冬」を描いた「ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの間」)など、フランス各地の公共建造物の広い壁を飾ります。

パンテオンに近い、パリ・ソルボンヌ大学の階段教室は、850名を収容出来る大講堂で、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ『聖なる森』(1886-1889年制作)の大作(高さ5,7m x 横26m)があります。象徴派を代表する画家の名に相応しく、13世紀中葉、ロベール・ド・ソルボンが開いた神学校ソルボンヌを構図の中央に据え、左右対象形に、文芸(雄弁術、詩、歴史、考古学、哲学)と科学(地理、物理、化学、植物学)のアレゴリーを体現する女性たちが、知の世界を代弁しています。

復活祭は、3月21日春分の日を過ぎて、最初の満月後の日曜日で、キリスト教において、最も重要な行事です。なぜなら、イエス・キリストは人を救う救済者として死ぬ、言い換えれば、キリストの死、人の死に意味を与え、精霊として地上に戻ることを告げるからです。人が満月に思いを寄せ、願いをかけるのは、満月の光に乗って聖霊が降りてくる、と思うからかも知れません。

パリを見護る聖ジュヌヴィエーヴ（撮影：古賀 順子様）

